

〈鳥海山麓だより〉二〇一一年秋

切ない話

鈴木京子

秋ねえ…。十一月は初旬であつてももう「冬」だ。

九月末に刈り入れた稲を二週間ほど天日乾燥させているうちに、冬の気配を感じるようになり、十一月に入ればもう、寒がりの私なんかは外での仕事が苦になってしまう。

だから、この期間、関東で暮らしていた感覚で秋を楽しんでいたりと、冬支度に出遅れて痛い思いをする。冷たく容赦のない強風と雨がやってくる前に、夏の畑を片付け、来春用にたまねぎの苗を植え、家の周りの風囲いを終わらせる。

そんな暮らしのリズムに気づかなかつたころ、「あれ、隣のじっちゃん、もう風囲いしてるよ。まだ早いよね」なんて余裕かましていたら、翌週末には強風と雷と突発的な雨が襲ってきて、あまりに危険で外での作業なんかできなくなった。結局、その年は、冬を迎える作法も、お迎えした冬の怖さも知らないまま、冬に突入した。

思い返すと、移住一年目のあの十一月に「生涯で一番寒かった家」を体験した気がする。今はもう慣れたからね。

それにしても、今年の秋はどこにあつたのかなあ。

ここに暮らすようになって、「収穫の秋」という慣用語も自分にはしっくりこなくなつた。品目と量でいえば「収穫の夏」ダヨ。ああ、コメ農家さんにとっては「収入の秋」なのかな。秋ねえ…。まだほんのりと夏の名残があつてポカポカとした十月下旬。あの半月くらいが短い秋なのか。関東で着ていた秋用の衣類は、もう何年も着る機会がない。

ところで、どうしてこんなに「秋」を考えってしまうのか。結局「冬」を考えたくないのかもしれない。

去年は十一月と十二月の二カ月間、もち加工場で働いた。時給七五〇円、朝七時半から夕方六時過ぎまで、十二月に入ると日曜日も出勤になった。重いし、寒いし、時間に追われるし。私にとっては過去最強の過酷な労働だったのだが、そこで愚痴もこぼさず主力と



遊佐町から望む十一月の鳥海山

して働いていたのが、四十年代後半から五十代の農家女性だった。

彼女たちは「こんな労働条件なのに」と私が腹立たしく思うほど、よく働く。「こんな労働条件」とは、たとえば――。

「作業開始一〇分前に身支度を整えて事務所に集合」が決まりなのだが、事務所の時計は五分進んでいる。一方、作業場の時計は時間ぴったり。だから、十二時に作業を止めて、着替えて、昼食をとって、また着替えて集合するまでの時間は、実際には四五分。上の白衣、エプロン、帽子、マスクなどの身支度に五分はかかるからネ、四〇分しか休めない。始業時間も一〇分前集合（実際には一五分前！）だが、朝礼には二分もかけずに作業開始となるので、少なくとも毎朝一〇分は余計に働くことになる。さらに、タイムカードは三十分単位なのに、夕方六時十分過ぎの終業が多く、六時三十分になる前にロッカー室から追い出される。

こんな細かい（せこい！）ことが、どれほど会社の利益に影響するのは疑問だが、工場を取り仕切る（社長の）奥さん”の激情型性格もあって、なかなか季節労働者が定着しないらしい。

そんななかで、十年近く働いているのが、ミヨちゃん、アベちゃん、オトちゃん、コバヤシさん。彼女たちは、手のひらの水ぶくれが手袋の下でつぶれるほど、つきたての熱い餅を一日中ちぎっては測る。かと思えば、冷たい水で一日中、六〇〇キロの餅米を洗う。驚いたことに、みな農家の跡取り娘だった。

ある日の昼休み、みかんを食べながら「昔だば、みかんの出稼ぎに行ったけよのお」とアベちゃんが言った。現在四七歳の彼女が小学生の頃まで、彼女の家では牛の世話がある父親を残し、冬は祖父母と母が静岡のみかん農家へ出稼ぎに行った。私とアベちゃんは五歳しか違わない。一九七〇年代、さみしい庄内の冬をアベちゃんは、母も祖母もなく、父親と孫ばっちゃん（曾祖母）と過ごしたのだ。切ないナア。

「ミヨコ、おめえだけ休みか？ ああ、おめえ、結婚遅いさけの」

ある日の朝礼で、奥さんが言った。アベちゃんとミヨちゃんは同じ年だが、結婚の遅かったミヨちゃんにはまだ小学生の子どもがいて、その学校行事で休むのだという。気にも留めなかったその話を、内緒でこっそり集まった飲み会で思い出すことになった。

ミヨちゃんには三人の娘がいて、長女は高校卒業後、上京を望んでいるらしい。「行ぎてものはしらがねっ。もう少し餅屋で稼がねばなんねのっ」とミヨちゃんはビールジョッキを持って気合を入れた。「行きてば行がせる。おめえも苦労したんでろっ」と誰かが応じた。黙って隣りに座っていた私にミヨちゃんが語り出した。「オレ、跡取りなんどもっ、結婚してえ人できてのっ。反対されるとも思わねで、嫁行きてって言ったたら、両親もじっちゃんもばっちゃんも『なへ、嫁に行がねばなんねなだ（なぜ嫁に行く必要があるのか）？』ってのっ。で、オレ、結婚、おせえなだ（遅いのだ）」。

一緒に働いてひと月も経たない私にあっけらかんと話しておいて、だけどミヨちゃんは「なへ、嫁に」のところで一瞬声をつまらせ、そのあと、目を赤くさせた。たった二十年しか経っていない別れだもの。切ないなあ。そんな切ない話を、季節労働先の奥さんにも知られてしまう環境で生きてきた二十年だもの。
ひどく切ないヨ。



Photo : Kyoko Suzuki